

園田 暁子（英語学・英文学）

Coleridge's Literary Professionalism: Literature as a Vocation and as a Trade

本論文はイギリスロマン派詩人、S. L. コールリッジの文筆活動の実態を、詩人の天職意識と社会及び読者との関係、18世紀後半から19世紀前半における文学者の社会的文化的役割との関係等を主たる問題点として分析し、詩人の天職意識と職業意識(文筆業の意識)が両立し、かつ調和することによってコールリッジ文学が成立していることを実証的に明らかにした。この問題意識は、国内外における従来のコールリッジ批評ではほとんど言及されることはなく、コールリッジの文筆活動の性質について補強されるべき重要な論点であることを同時に証明した。さらに、従来批評においては比較的閑却される傾向にあった後期詩作の再評価もこの視点において行い、その重要性和作品の質の高さを主張した批評的功績は特記してよい。

序論では、本論文の主題である天職意識と職業意識が、ロマン派詩人にとり現実的問題として避けられない葛藤であることを示し、コールリッジがこの葛藤の中から文筆業という概念を実践するに至る必然性を明らかにした。さらに葛藤から調和を見出すコールリッジの姿勢が結果的にはその天職意識を深めるものとなったことを最終的に証明する本論文の道筋を明らかにしている。

第一章では、詩人の読者観及び創作の社会的役割を中心に分析する。コールリッジの創作意識は本来読者の存在を強く意識するものであり、その思考に刺激を与え、精神的糧となることを期待するという道徳的性質を持つ。この目的において創刊された『ザ・ウォッチマン』の実績を検証し、短命で終わった原因を詳細に検討することにより詩人の読者観の変化を明らかにする。

第二章では、イギリスロマン派文学において重要な論点であるパトロネージ及び著作権の問題がコールリッジの創作活動にいかなる意味を持つかについて論考する。コールリッジはワーズワース等他のロマン派詩人と異なり著作権にこだわることはなく、パトロンによる支援に多く期待するが、この姿勢が文学の社会的役割をよりリベラルに考える彼の文学活動の性質を説明することを実証的に示す。

第三章では、18世紀以降のイギリス社会に大きな役割を果たすジャーナリズムの重要性を、特に作品発表の場として強く認識するコールリッジの政治的作品について分析する。『モーニング・ポスト』紙に寄稿した対仏戦争時の作品は、ロマン派詩作共通のコードである自由精神の実現という主題を一貫して示すが、コールリッジの場合この主題が特にジャーナリズム精神と調和する社会的意識を鮮明に示すことを検証した。

第四章では、コールリッジの読者に対する教育的意識を明らかにするために、1820年代から30年代にかけ隆盛した年刊詞華集への寄稿作品を分析し、これら後期作品の啓蒙的性質と文学的質の高さを十分な論拠を示し主張した。後期作品の多くは寄稿の要請に応じるものであるがコールリッジ独特の鋭い詩的洞察を含み、秀作と呼び得るものが少なくないことを明晰に論じた。

結論は、晩年の評論活動に焦点を絞り、詩人の読者論としての「クレリシー」(知識人読者階層)に関する論説をコールリッジの職業的文人論として分析する。特に文人が文化の継承や国民の教育等の重要な社会的責務を負うという道徳的特質をコールリッジの文学的感覚として再確認し、詩人がこの目的を實踐し得たことを結論的に主張した。

以上、本研究は、コールリッジの天職意識と職業としての文筆活動が、詩人の強い社会的関心と文学的力量において、むしろ本来の天職意識を全うする必然的な側面であったことを多面的かつ実証的に論じ、この批評的命題を証明したものである。本研究の成果は内外のコールリッジ研究のみならず、イギリスロマン派文学研究に重要な寄与を行うものであり、優れた業績である。

よって本調査委員会は、申請論文の提出者が博士(文学)の学位を授与されるに十分であると認める。